

※2013年度日本造園学会関西支部大会ポスター発表コンテンツ部分抜粋

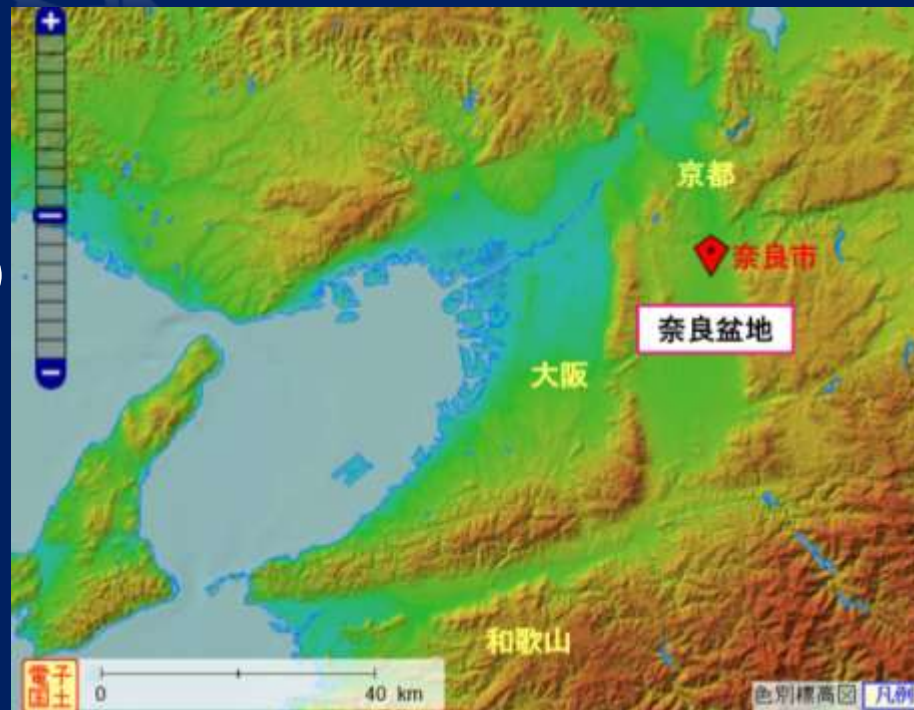
奈良、水と人のランドスケープ

I：小野坂友里絵、齋藤拓也、玉崎裕也、福井景子、松林涼子

II：今井美陽、太田未菜子、大道夏穂、土井彩加、中村祥吉、
西村恵里、山方しほ [監修：井原縁] (奈良県立大学)

はじめに：奈良盆地と水

- ✕ 標高500～1000m前後の山々に囲まれた平坦な盆地。東西16km, 南北30km, 面積約300km²(淡路島の約半分)
- ✕ 大阪平野, 京都盆地等と共に瀬戸内陥没地帯の東端をなす。地殻変動で盆地が作られる前(300～100万年前)は湖。山から流れ込む河川が湖底に土砂を堆積し, 地表に現れ, 盆地化



成り立ちからしても河川と関係が深いが,

土地の人々にとっては, 決して水に恵まれた環境ではない。

土地の人々は, その厳しさを「干損」「水損」という言葉で表してきた。

その背景には, 奈良盆地域固有の気候と地形が影響している。

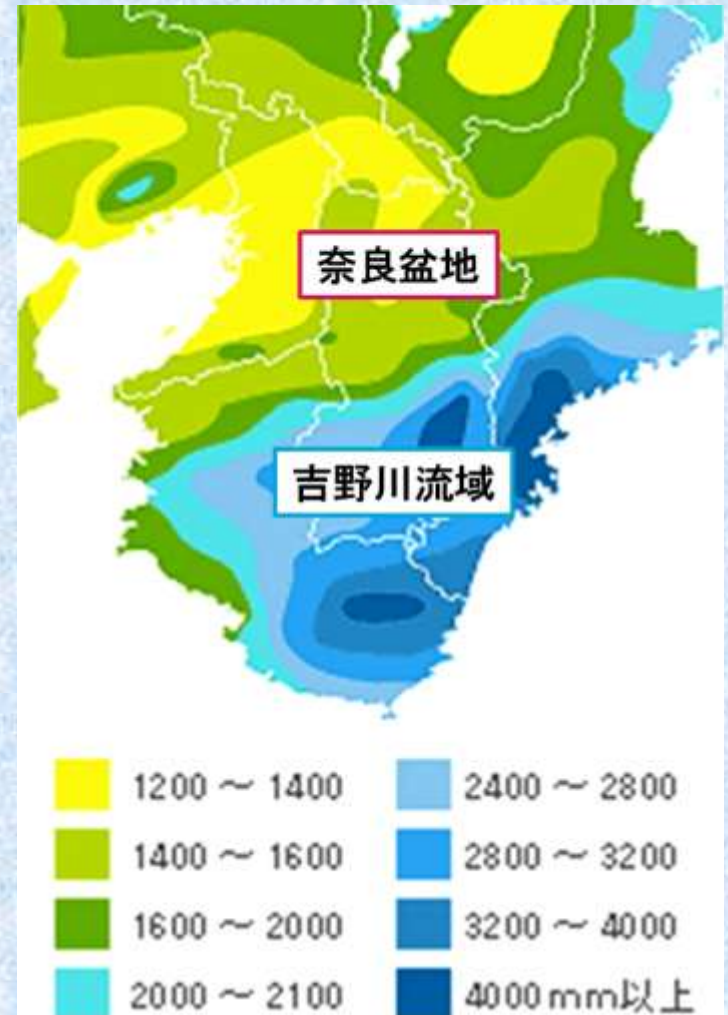
奈良盆地と水②

(1) 「干損」

⇒ 気候上の特徴「温暖少雨」

年間を通じて雨が少なく、日本の年間平均降水量を大きく下回る。

※「大和豊年米食わず」…適量の雨が降り豊作になった年は、他地域は雨が多すぎ凶作になるという意味の諺。
ただし、奈良県南部の吉野川流域は有数の多雨地帯で、県北部の奈良盆地とは大きな降水量の差がある。

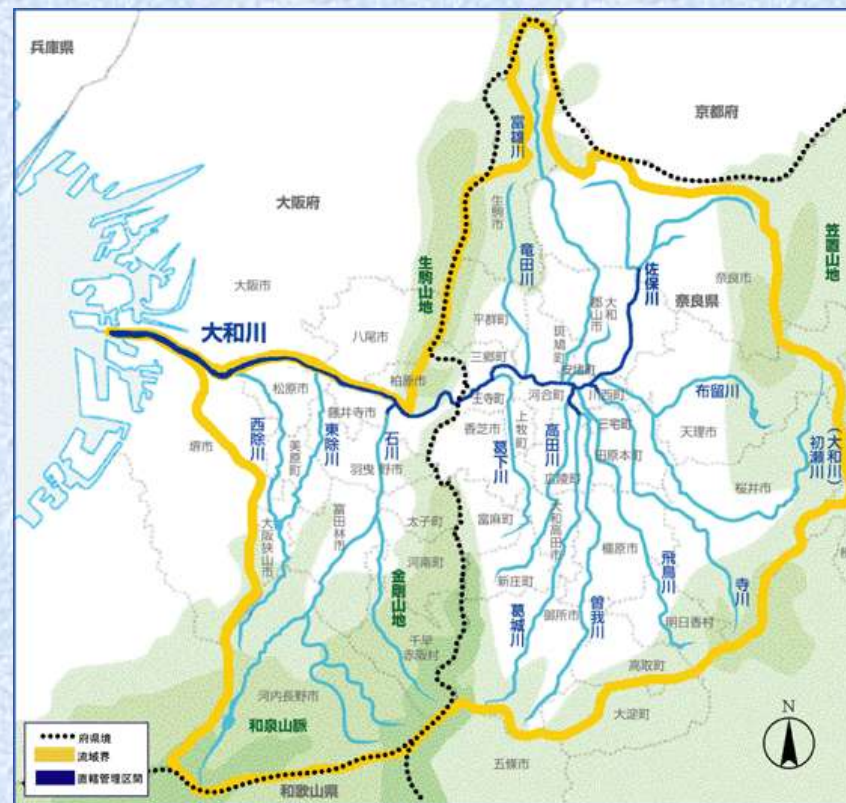


Basemap：近畿農政局HP掲載データより

奈良盆地と水③

(2) 「水損」

⇒ 地形上の特徴「河川流量の少なさ」
盆地を囲む山々から流れ出る河川は平野中央部に集まり、大和川となって大阪湾に流れ込む。山は浅く急勾配で、山地が平地の1.3倍しかない(安定した用水確保には10倍以上の流域面積が必要)ため、これらの河川は流量が少なく、安定した用水確保が難しい。ゆえに古代より水路の勾配を緩やかにする河川改修を行ってきたが、土砂の堆積が進み、洪水の被害が増加することとなった。



出典：国土交通省近畿地方整備局
大和川河川事務所HP

奈良盆地と水④

奈良盆地は水に恵まれぬ環境ゆえに、
水を大切な存在として
畏れ敬い、親しみ、生活に取り入れるための
創意工夫を凝らしてきた歴史がある。



このような奈良盆地ならではの
水と人との関係性は
土地Landに刻まれ、
ランドスケープLandscapeに現れてきた。



ランドスケープを手掛かりに、
奈良盆地固有の水と人の関わり合いを読み解くことが可能。

対象地 奈良市中心市街地

対象地の特徴 1

奈良盆地の北東端に位置する奈良市中心部。平城京の左京，外京にあたり，古くから人が住み，賑わいを呈してきた。東大寺，興福寺，春日大社など著名な文化遺産と奈良公園や佐保山丘陵など豊かな緑を包含。

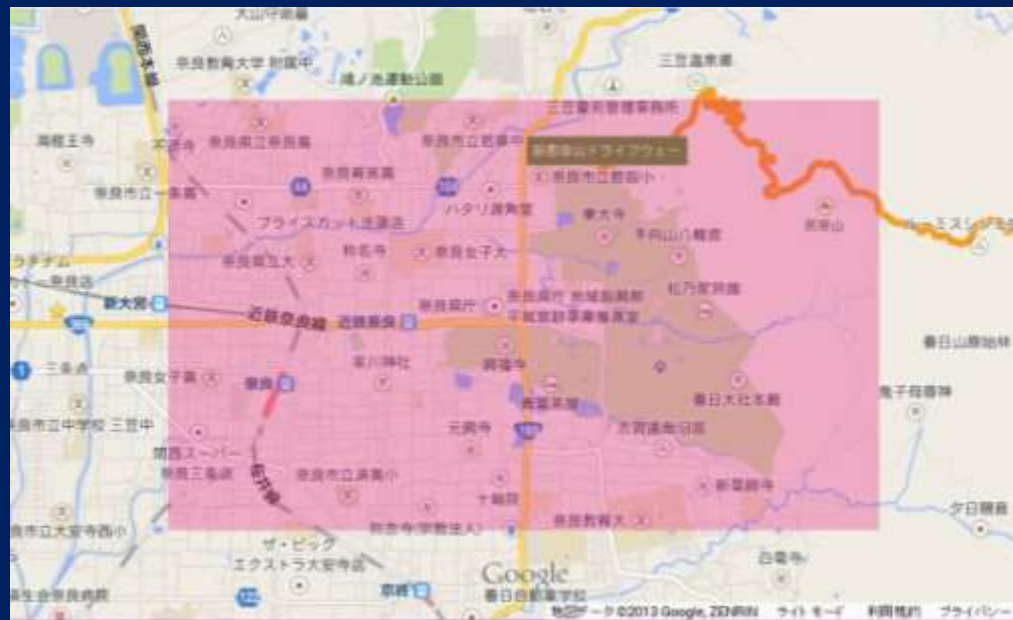


仮説 1

この地には，古くから築かれてきた
「人と水との関係性」の豊かさを物語る，
多様なランドスケープが集積しているのではないか。

対象地の特徴 2

奈良県の県都である奈良市の中核として、また全国有数の観光地として、特に近現代において都市化が顕著に進んだ。その過程で暗渠化した河川も多い。高度経済成長期は水質悪化がしばしば問題となった。



仮説 2

現在「人と水との関係性」の豊かさを物語る
ランドスケープは大きく変貌しており、
痕跡化ないし消失しているものも多いのではないか。

目的と方法

仮説1，2に基づき，対象地において
「人と水との関係性」の豊かさを物語るランドスケープの発見と
その変遷に関する情報収集・整理を行い，
この土地ならではの「人と水との関係性」を読み解く。
さらに，一連の作業を踏まえ，今後のありかたについて考究する。



ランドスケープを手掛かりに、
歴史が古く、かつ現代的な都市機能が集積している
奈良市中心市街地固有の水と人の関わり合いを読み解き、
今後のあるべき姿を思考する。

対象地を流れる主要な3河川：佐保川・率川・吉城川に焦点を当て、その流域で、以下の2種類のランドスケープの悉皆調査を実施。

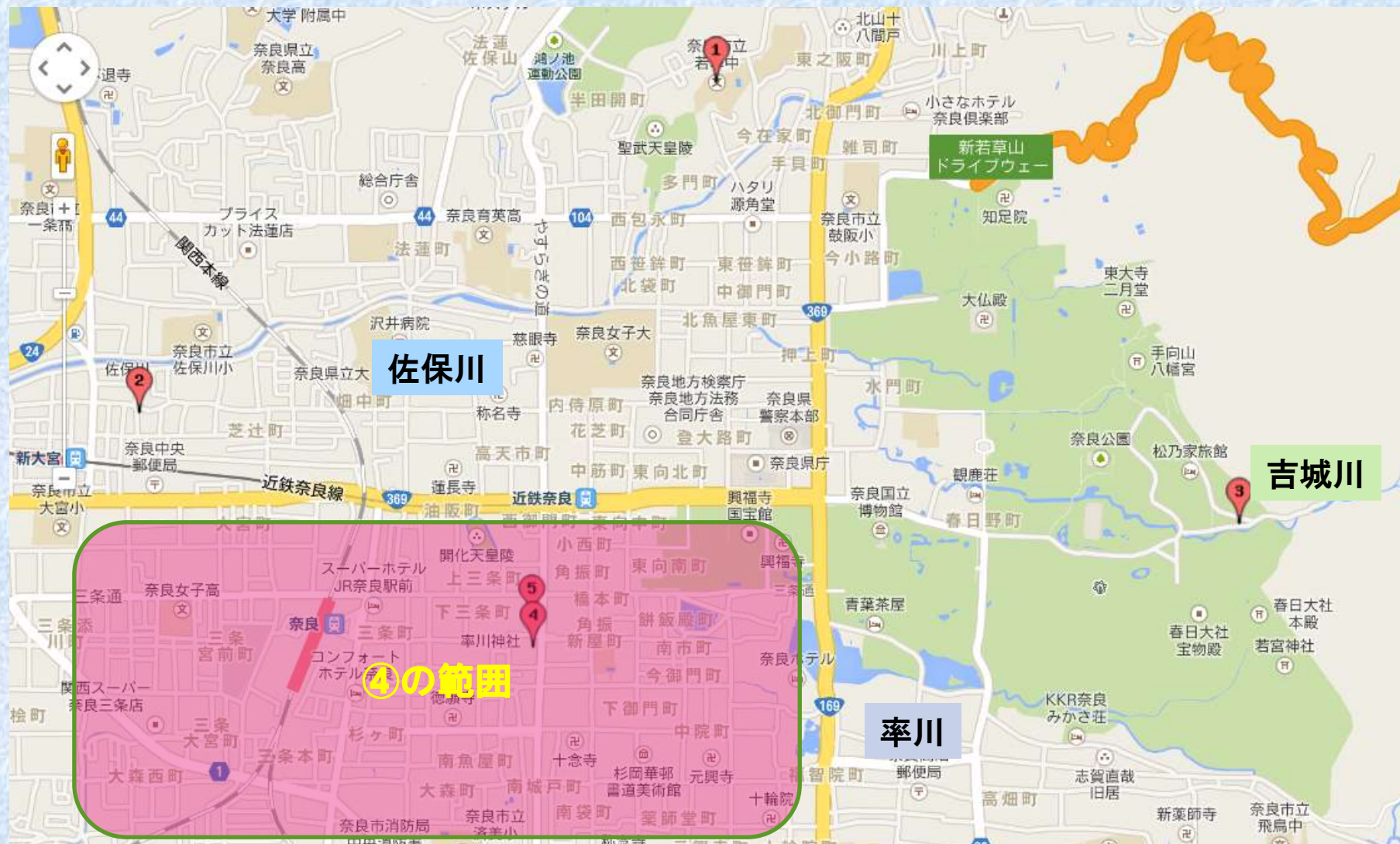
- I かつては「人と水との関係性」により形成されていたが、それが衰微し、痕跡化している「**痕跡ランドスケープ**」
- II 「人と水との関係性」が、変貌しつつも**継承**されている「**ランドスケープ遺産**」

調査は、現地踏査・関係者ヒアリングと共に、奈良関連文献（風土記、地誌、観光案内、紀行文、名所図会、写真集、地名辞典、自治体史、整備報告書）を網羅し、該当するランドスケープの洗い出しと、生成・変遷・現況に関する情報の収集・整理を行った。



以下、その成果から代表的なものを抽出し、掲示する。

水との繋がりは衰微している 「痕跡ランドスケープ」



① 多聞山城址（佐保川流域）

多聞山城は、佐保山（那羅山）丘陵の東南端、標高115mの低い丘陵地（盆地との標高差は約50m）に築かれた平山城であった。近世城郭の先駆けとも称され、地形を上手く利用した四階櫓と周囲を囲む堀が特徴であった。南に佐保川が流れ、東に京街道が通る交通の要衝で、城を囲むように流れる佐保川は、防御の堀に利用されていたと考えられている。

現在、その城址の大半は奈良市立若草中学校として整地されている。昭和23(1948)年の学校建設までは、廃城のまま放置されていたという。今は、中学校に立つ石碑のみが多聞城の記憶を伝えるが、その地形からは、往時の姿を辛うじてしのぶことはできる。また、中学校周辺には、城を取り囲む石垣に利用されていたという複数の石仏が置かれている。



② 芝辻のノガミさん（佐保川流域）

ノガミさんとは、農家の人たちが信仰し、ノガミ行事（野神行事。村のはずれにある樹や祠，神社の境内の大木などを農業神として祀る行事）と共に残ってきた神木である。芝辻町のノガミさんである大楠の周りには、かつて田畑が広がっていた。しかし昭和49(1974)年頃から都市化が進み、その光景は大きく変貌した。ノガミさんの脇にあった水田は駐車場となり、舗装された道が迫り、張り出していた枝は大きく伐られてしまった。

ノガミ行事は変容しつつ現在も続いているが、その担い手は農家ではなく、会社勤めや不動産，駐車場経営などの職種に就いている。ノガミさんに対しても、車が通行しにくい、花や葉が邪魔といった苦情が寄せられているという。かつて水と共にある生業を基盤に成立していたノガミさんは、まちと人々の生活の変化と共に、厳しい時代を迎えている。



昭和49年頃

出典：安彦勤吾監修『奈良市今昔写真集』2008

③ 氷池址と月日磐（吉城川流域）

春日山麓、水谷川（吉城川上流）のほとりに「日月」の形を掘った盤石がある。これが「月日磐で、平城遷都と共に、近くに氷池を作り、厳冬に結氷させたものを、磐あたりにあったとされる氷室（氷の貯蔵庫）に貯え、夏に平城宮へ献氷していた。氷室は、吉城川氷室、春日氷室、水谷氷室などと呼ばれ、延喜式（967施行）によると、全国にある540の氷池のうち、皇室用の10ヶ所のひとつである。和銅4(711)年6月1日初めて献氷の勅祭が行われ、以後恒例となったが、平安時代に入り臨時祭となり衰微。貞観年間(859~877)には氷室神社が別の地（現在地）に遷座した。

かつて重要な氷池と氷室があったこの地は、その機能・記憶の喪失と共に痕跡化し、現在は辛うじてその磐と「氷池趾」と彫られた石、一基の燈籠を目にすることができる程度である。



③ 氷池址と月日磐 [続]

奈良時代にこの地で行われていた献氷祭は、興福寺の東、吉城川を背に南面する現在の氷室神社において、毎年5月1日に開催されている。長く廃れていたが、京都の製氷会社と大阪氷業界の力により明治45(1912)年に復興。毎年7月15日に開催されるようになる。昭和35(1960)年に祭日を5月1日に変更、その後も毎年、各地の製氷業者が集い、神前に花や魚を埋め込んだ氷の柱を並べ、舞楽を奉納する祭礼が続いている。

復興した献氷祭は、現在の氷室神社が坐するエリアで完結している。かつての氷池、氷室址は、その間もひっそりと山中に存在しており、知る人ぞ知る存在である。



④ 橋の痕跡群（率川流域）

率川（河川管理上の正式名称は菩提川だが、場所により率川、子守川、伝香川などと称される）は、美しい円錐形の御蓋山を水源に、尾花谷川や御手洗川などの流れを集めつつ、奈良のまちの中央を横切り佐保川（中流域）に注ぐ。特に高度経済成長期を中心に、都市整備に伴う暗渠化が次第に進み、現在は市街地を流れる大半が暗渠化されている。しかし、暗渠化し上部が道路となっても、かつての橋の親柱や欄干が複数まちなかに点在している（※この実態は奈良県立図書情報館「図書館劇場友の会」のまちかど遺産調査No.14，および帯谷博明「消えた川の記憶—ならまち率川物語」『大学的奈良ガイド』2009に詳しい）。

橋の親柱だけでも現在に残しておく理由は、技術的継承のためか、川への愛情か、それとも謝罪なのか。

伝香橋今昔



入江泰吉撮影（昭和27年頃）

出典：『入江泰吉の原風景 昭和の奈良大和路』2011

④ 橋の痕跡群 [続]

率川橋今昔



現在、まちの中央部を流れる率川は、大半が暗渠化（点線部）している。

出典：帯谷博明「消えた川の記憶—ならまち率川物語」『大学的奈良ガイド』2009,105pp.

入江泰吉撮影（昭和30年頃）

出典：『入江泰吉の原風景 昭和の奈良大和路』2011

⑤ 率川神社（率川流域）

奈良市内最古の神社で、元は水分の神、灌漑の神、加えて農業信仰から、人間の繁栄全般を守る神であった。『古事記』や『日本書紀』によると、開化天皇が都を春日之地に遷し「春日率川宮」と称せられたとあり、その宮がこのエリアと考えられている。いずれにせよ、かつてこの界隈（神社の南）を流れていた川が存在によるところが大きい。しかし今は暗渠化している。

現在、率川神社は「子守明神」として知られる。これは、三棟の本殿左側の狹井大神と右側の玉櫛姫命（夫婦）が、中央の五十鈴姫命（娘）をよりそい守るような姿で鎮座している事と、後に“水分(ミクマリ)の神”が訛って“子守(コマモリ)明神”と呼ばれるようになった事に由来するという。



夏の例祭[三枝祭。古代より国家祀典であったが衰微し、明治14(1881)年に再興]。普段はひっそりとしている（上図）

II 水との繋がりが継承されている 「ランドスケープ遺産」



① 佐保川の桜（佐保川流域）

江戸末期，奈良奉行の川路聖謨が町民の協力で植樹したのが始まり。佐保川は，古より歌に詠まれ，「佐保川の蜚」が南都八景（室町）にも挙げられる美しい川だったが，戦時中は下水道と化し，戦後も排水で汚染された状態が続いていた。桜並木も，寿命もあり廃れていった。その状況を嘆いた地元住民が1960年頃から川を美しくするための清掃活動や植栽を開始。平成21（2009）年に50回を迎え，現在に至る。

水質は徐々に改善され，美しい桜並木が復活。川を愛する地元住民が，一度は汚れてしまった川の再生に成功した象徴のランドスケープである。



出典：橋守国・画『絵本通宝志』

1730年刊

金沢美術工芸大学
絵手本データベース



昭和48年頃 佐保川清掃

出典：安彦勤吾監修『奈良市今昔写真集』2008

② 今在家町の石橋と新石橋（佐保川流域）

佐保川に架かる新旧二つの橋。

写真左手は慶安3(1650)年，奈良奉行所が築造した石橋。旧街道筋にあり，京都や伊賀，八幡への玄関口として機能。長さ約15mの巨大な橋で，東大寺の元禄の復興時，巨大な梁や柱が川を無事に渡ることができたのはこの橋のおかげでもある。

大正期に上面がコンクリート舗装され，往時の面影を残すのは中央の橋脚と桁石，護岸石垣のみ。写真右手は，昭和15(1940)年に京都～橿原神宮間が国道整備された際に架けられたコンクリート製の「新石橋」。奈良～京都を結ぶ新旧の重要な橋として，現在も機能し続けている。



入江泰吉撮影（昭和31年）

出典：『入江泰吉の原風景 昭和の奈良大和』2011

③ 吉城川に依る庭園①（吉城川流域）

× 依水園

国名勝。吉城川が大きく屈曲する付近に広がる，作庭時期の異なる二つの庭園が合体した回遊式庭園。前園(西部)は，1670年代に奈良の晒業者，清須美道清が興福寺摩尼殊院の別業址に建てた別荘に付随。後園(東部)は，東大寺西南院址、吉城川を利用した奈良晒の干場として有名だった地を、明治32(1899)年 関藤次郎(奈良晒で財を成した富豪)が大改修・築造。昔，晒の作業に使用していた石臼を利用した沢飛石がみられる。

池の水は，本来は，園南側に沿って東方から流れる吉城川の水を引き入れ，東池→細流→西池と流す構造。「依水園」の名はそこからきているとの説もある。しかし，現在は水位の低下により，地下水のポンプ循環になっている。



④ 吉城川に依る庭園②（吉城川流域）

× 奈良県新公会堂の庭園

新公会堂は、奈良県置県100年を記念し平成元(1989)年に建立。敷地内には日本庭園が設けられ、現在も無料で公開されている。ガーデンパーティーや懇親会のために貸出しも行われており、一般人と最も馴染みの深い庭園ともいえる。吉城川上流の水谷川の水を引いており、吉城川流域のなかで最上流に位置する庭園である。



⑤ 水谷川と水谷神社（吉城川流域）

春日山の水源から流れ出る水谷川の清流は、下って吉城川となる。月日磐と呼ばれるところで文永4(1267)年4月人工的に分水し、春日大社に引水。春日大社の回廊をくぐり、参道の下を横切って南の岸に白藤の滝として流れ落ちている（※御手洗川参照）。春日大社にはこの流れを渡る8本の橋があり、通るごとに心身が浄化されていくという伝承がある。

水谷橋はその橋のひとつで、境内の北端に位置する水谷神社（春日大社摂社）に繋がっている。周辺の川沿いには、明治以降奈良公園整備の過程で大量の紅葉が植栽されており、人々の目を楽しませている。信仰と鑑賞が生み出す美しいランドスケープ。



⑥ 御手洗川（率川流域）

春日大社の境内を流れている御手洗川は、鎌倉時代、春日山を水源とする吉城川上流部（水谷川）から「月日磐」を境に引き込んだもの。境内を経て、鹿苑の脇を流れ飛火野⇒浅芽ヶ原⇒興福寺境内を経て猿沢池に流入し、率川へと集約する。

元来は春日祭の勅使、また通常の参拝者もここで手を清めていたが、現在はその風習は失われている。江戸時代に出版された『南都名所記』には「みたらしや清きながれにみそぎして心もすめる神の御まへに」という句が記されており、この川が禊の場であり、神聖な存在であったことを示す。細い流れで、日照り続き折などは水が涸れていることも多いが、昔から同様であったらしく、延々と「細き流れ」として継承されていることは、特筆に値する。



みたらし川

出典：太田叙親・村井道弘共編
『南都名所集巻第一』1675年刊
『日本名所 風俗図会 9 奈良の巻』
1984より

⑦ 鷺池（率川流域）

明治41(1908)年，率川（菩提川）の水を引き込み，県が奈良公園浅茅ヶ原（春日大社参道南の丘陵地）水景整備の一環として築造。他の池に比すると歴史は浅いが，周囲の池（猿沢池，荒池）とは異なり，人が眺望を楽しむことを主目的に作られた池として貴重。1916年には，水上から眺望を楽しむために，浮見堂が建てられた。周囲には桜，サルスベリ，紅葉などが植栽され，四季を全景で見渡すことができる。

現在も，この眺望を楽しむために多くの人々が訪れている。観光客には撮影スポットとして人気が高く，地元住民も写生や憩いの場として利用している。奈良の中心市街地で豊かな水の眺望を贅沢に享受できる，貴重かつ希少なランドスケープ。



大正初め頃（浮見堂建立前）

出典：藤井辰三編著『写真集 明治大正昭和奈良』1979

⑧ 荒池（率川流域）

天正17(1589)年，豊臣秀吉の命により，率川（菩提川）の水を引き込み築造したと伝えられるが，現在の荒池は明治21(1888)年に三条町，杉ヶ町，大森町の三町の手で灌漑用水池として築造されたもの。

荒池東側の対岸には昭和の中頃まで民家が立ち並んでいたが，荒池園地（奈良公園）整備の過程で撤去された。また，昭和20年代頃には荒池北西にボート乗り場があり、遊覧を楽しんでいたがこれも今はない。

生活・生業用水の池→従来機能＋遊覧との池→治水と鑑賞の池，と変化しつつ，現在に受け継がれている。



入江泰吉撮影（昭和20年代）
出典：『入江泰吉の原風景
昭和の奈良大和』2011

⑨ 猿沢池（率川流域）

平城遷都と共に興福寺が創建された際、放生会（万物の生命をいつくしみ、捕らえられた生き物を野に放つことで功德を得る宗教儀式）の池として、天平21年（749年）に築造された。それ以前から、池としては既に存在していたとの説もある。

平城京左京の十六坪を占めていた境内地のうち、三条大路を挟んで南側の四坪分は花卉畑で、このなかに猿沢池があったという。古より現在に至るまで、多くの説話・伝承が残されている。また、広がりのある水面の美しさも古くから知られ、「猿沢の月」が南都八景（室町）に挙げられている。現在も、興福寺五重塔が周囲の柳と一緒に水面に映るさまを、多くの人々が楽しんでいる。



出典：橘守国・画『絵本通宝志』1730年刊
金沢美術工芸大学絵手本データベース